

# 最上義光の不思議

元最上義光歴史館事務局長  
片桐 繁雄



最上義光像  
(「山形県史談」より)

最上義光は天正19(1591)年、46歳の正月に、従四位下侍従兼出羽守という地位を与えられ、それから後は、京都で暮らす日が多くなりました。

なんとといっても京都は都、朝廷があり多数の寺社があり、つい先頃までは武家政権の幕府もありました。沢山の人間。雑多な職業。治安は今いち。あらゆる種類の人間が活動していました。この時代、桃山～江戸初期は、芸術文化が一斉に花開いた日本の文芸復興期という評価もあります。

義光はそういう京都へ入りこみ、たちまち驚くべき文学的才能を発揮しました。特に連歌においては、当代主要作家10人の一人と評価されるほどになったのです(木藤才蔵博士『連歌史論考』)。

連歌はこの時代には非常に流行しましたが、誰もが作れるものではありませんでした。繁雑なきまりがある上に、「源氏物語」「古今和歌集」などの古典を勉強しないでは連歌は作れないのです。京の上流社会は、教養品格を重んじました。卑しい人間、粗野で無教養な人間は、厳しく排除されます。連歌の座は特にそうでした。そういう世界に飛びこんで、義光は目覚ましい活躍をしたのです。

参加した連歌で現在確認できるのは33巻、句数は248句。当時の大名たちの中では、数においても質においても、細川幽斎を別格とすればトップクラスです。同席者もそうそうたるメンバーです。

たとえば里村紹巴<sup>じょうぱ</sup>。連歌の最高権威者です。飛鳥井雅庸<sup>あすかいまきつね</sup>、日野輝資<sup>てるすけ</sup>。この人たちは、朝廷に仕えて、和歌、連歌、書道、蹴毬などを天皇や公家たちに教えていた堂上文人。聖護院道澄<sup>どうちよう</sup>は、関白近衛前久<sup>このえさきひさ</sup>の弟、天台修験の本山聖護院の院主。特に「准三宮」という高い称号を与えられました。当代きつての博識、細川幽斎。秀吉でさえ一目おいた傑僧<sup>もくじきおうこ</sup>、木食応其<sup>もくじきおうこ</sup>。

政界・武門の有力者もいます。京都守護の前田玄以。秀吉の参謀と言われる黒田官兵衛孝高。名誉ある武人にして風雅を愛した山中長俊<sup>はいやじょうゆう</sup>。財界では染色材料大手業者、灰屋紹由<sup>はいやじょうゆう</sup>。河川改修で名を揚げた角倉了以<sup>すみのくらりょうい</sup>。

こういう人たちが、最上義光と同座して、高雅な連歌文芸の世界を共に作り、楽しみを分かち合ったわけです。

義光は、連歌に関する堂々たる解説書も執筆しました。『義光注・紹巴加筆/連歌新式』という表題で刊本となっています。

それにしても、京から遥かに遠い出羽山形の大名が、すぐれた連歌を詠じ、くわしい解説書を執筆していたことは、不思議と言うしかありません。

義光はいったい、いつどこで、こんなに勉強し、すぐれた能力を身につけたのでしょうか。

最上義光没後400年。彼に対する従来の評価は、はたして正しいかどうか。読者の皆様方に、ぜひお考えいただきたいと願っております。



光禅寺正門



最上義光のお墓

## 最上義光公 没後四百年記念事業

開催された記念事業・  
これから開催される記念事業

- ◆4月20日(土) オープニングセレモニー
- ◆5月25日(土) 三ノ丸ウォーキング
- ◆7月～10月 義光公街なか宝探し
- ◆7月～11月 最上義光歴史館にて特別展
- ◆10月12日(土)・13日(日) 記念事業メインイベント